

松井辰之助氏の「商業經營論」

室谷賢治郎

大阪商科大學助教授松井辰之助氏の新著「商業經營論」(千倉書房版經營學大系)は菊版四〇九頁の裡に商業經營に關する理論と政策とを縷説した力作で、單に學徒によつて覽られるのみならず實務家によつても讀まらるべき書である。著者は嘗て拙著「經營經濟學概論」に對する紹介批評文を惠まれた時に記されたことがある。「今日の經營經濟學にとつて最も困難な一の問題は斯學の内容を教科的な手頃な形態でまとめ上げるといふ事柄である。困難の理由は二方面から來る。一は斯學になほ定説なきことであり、經營經濟學の性質、方法、對象等に異論對立の状態があるに加へて、二は理論的考察と政策的叙述とを、教科としては適當に收括せねばならぬからである。一の困難に對抗するには叙述が老大化する虞があり、二の困難を排除

松井辰之助氏の「商業經營論」(室谷)

しようとするれば教科として實際的役立ちに遺憾を感じしめる缺點がある」(經營經濟研究第十九冊一二〇頁)。即ち右に謂はれる理論的考察と政策的叙述とを適當に而も豊富に賦與することを成就せられた書が松井氏の近業に他ならぬのである。

松井氏の近業は前論と本論とから成り、本論は更に第一部と第二部とに分れる。前論は商業經營序論と題され、最廣義に於ける商業の意義と經營とを論じ、進んで商業社會における農業・工業・純粹商業の對立と發展に及ばれる。本論の第一部は商業經營理論に宛てられ、商業經營學の性質と對象、個別資本の經營過程、個別價格の形成過程其の他の若干問題を詳論せられる。本論の第二部は商業經營政策として財務、仕入、生産、販賣等を逐次に述べられ、特に販賣に關しては市場調査、商品化政策、豫算統制、販賣割當等の諸問題を取扱はれる。全一卷を通じて實に微に入り細を穿つ叙述は讀者を唯だ唯だ敬服せしめる。

併しながら松井氏の見解に對しては若干の異論を挿む餘地が無いではない。以下私見を加へることが許されるならば、先づ本書の劈頭に著者は商業を定義され

で「商業とは有形・無形の帶價格物を、他の經濟單位（個別經濟）に販賣することを最終的にして、且つ、本質的なる手段として、營利せむことを目的とする經濟單位（個別經濟）である」（四頁）とせられるが、是れは甚だ晦澁な表現に聞える。特に帶價格物といふ造語や、最終的・本質的といふ用語は必ずしも明白に受取れぬのである。商業が直ちに經濟單位（個別經濟）であると斷ぜられる點も、容易に理解し難いところに屬する。尙ほ著者が商業の目的を營利に置かれる立場は、余の根本的に反對したく考へる節である（拙著「商學提要」七頁參照）。

次に質疑の目的となるのは著者の把握せられる商業經營學の性質である。著者に從へば「元來、經營經濟學と、社會經濟學とは、學問上、何ら論理的に補完さるべき關係に立つ二つの經濟學（廣義における）でもなければ、従つてまた、相互に對照的に説明されねばならぬ何らの必然關係も存してゐる譯ではない」（九五頁）。「經濟學（社會經濟學）と經營學（經營經濟學）との相違は、根源的には、經濟現象の考察に對して取られる見地の相異に本く。相異なる見地に照應してそれ

ぞれの思惟方法が對應し、そしてそれに従つて夫々の認識の對象が定まる。經濟學は、經濟現象を自然性的全體の統一觀の立場、換言すれば、原因結果的全體的統一觀の立場において考察せむとし、これに對して、經營學は、經濟現象を意志性的全體の統一觀の立場、換言して、目的・手段過程的な全體の統一觀の立場において考察せむとする」（九五―九六頁）。然るに余の見所では經營經濟學も社會經濟學も共に著者の言はれる如く經濟現象を考察する限り認識の對象を異にするものでない。唯だ此の場合、認識の對象に取られるものが一は經營經濟であり、他は社會經濟であるといふだけで、經營經濟學と社會經濟學とは相互に補完せらるべき姉妹科學たり、兩者相俟つて一の母學——經濟學——を構成すると主張したのである。而して思惟方法を社會經濟學にあつては因果論的に、經營經濟學にあつては目的論的に、夫々限定する著者の見解は少しく獨斷に過ぎぬであらうか。之と全く正反對に社會經濟學を目的論的に、經營經濟學を因果論的に考察する可能性が信ぜられるのである（拙著「經營經濟學概論」三九―四〇頁參照）。著者自身も後には「原因、結果間の

「關聯を意味的に理解しやうとする」のが社會經濟學に於ける方法なることを言明して居られる程である（一〇五頁）。

更に疑問とすべき點が存する。それは著者が「商業經營學の認識對象は、一言につくすならば、個別資本の經營過程である」（一一六頁）とせられることに就てである。商業の經營に資本の缺くべからざることには謂ふまでもなきところであるが、併しさればとて資本の側からのみ説き盡されるとは考へられぬ。個別資本の運動過程を中心に經營經濟學を樹立しようとする企圖は既に東京帝大の中西寅雄教授によつて爲されたことがある（中西教授著「經營經濟學」昭和六年刊）。いま松井氏は「個別資本の經營過程とは、個別資本の運動過程ではない。その意は商業者の活動が資本において自己を表はすとみるのであつて、資本の運動が企業家をその意識的擔ひ手として現はれるといふ見方を取らないからである」（一一七頁）と論じ中西教授の立場と必ずしも同一でないことを明かにされるけれども、社會的總資本の動きを研究したマルクス經濟學の理論を商業經營學が踏襲して差支ないものか否かは大いに怪しまれ

松井辰之助氏の「商業經營論」（室谷）

るのである。

所謂個別資本の經營過程を認識の對象に求めるところから著者に於て必然的に取扱はねばならなくなつたものは個別價格の形成過程（一五一頁以下二四七頁）の長い章である。此の章は著者自らをして「借問する。かゝる説明は經濟學であるかも知れないが、經營學的説明とはならない」（一六六頁）と言ふに至らしめた程の箇所で、讀者にとつては恐らく經營學を俟つて後知る論議ではあるまい。經營經濟學の認識對象を社會經濟學のそれと異質的なものと力説する著者の立場からは撞着せぬであらうかを問はねばならぬ。

以上松井氏の新著に對して批評といふよりは寧ろ疑問の點のみを拾つて見た。著者の眞意を誤解して居らぬとも限らぬ。深く答められることなく教を垂れらるれば幸である。

——一九三七年十二月——